



退魔シスターズ  
Sisters of Exorcism  
聖女淫辱の儀式

小説 あらおし悠

挿絵 ねみぎつかさ

序章		006
第一章	シスター姉妹と苦悩する神父	021
第二章	望まぬ帰郷と少女の秘密	038
第三章	墮ちたる神父と聖女肛姦	071
第四章	プリムの秘密と陵辱の饗宴	122
第五章	狂宴と終焉と	183
終章		249

## 登場人物紹介

Characters



### プリム

聖女姉妹の妹。かつて母親が夢魔と関係を持ったため故郷の村を追われ、その後、修道院に入り退魔師としての教育を受けた。夢魔討伐が生きる目的になってしまっている。

### ローレル

聖女姉妹の姉。妹と同じく、幼くして故郷の村を離れ修道院で育った。慈悲深い性格で、魔物に対する憎しみに歪んでしまいがちな妹を諫めることもしばしば。

### レヴ

人間に淫夢を見せ精を奪うサキュバス。かつて、別のインキュバスと共に姉妹の母親を誘惑した。

### ファリナ

姉妹が故郷の村で出会った少女。何故か姉妹にそっくりだがその素性は判然としない。

### ジョゼフ

姉妹の教会にいた青年神父。二人の師に当たるが、現在は行方をくらましている。

「言ったでしよ。聖職者を試すつて。ふふ、このシスターの子宮は、インキュバスの精液をうまく受け入れてくれるかしら？」

巨大な陰茎が青筋を立ててヒクンと跳ねた。聖女の中に入るのを待ちきれないように。サキュバスがローレルのスカートを足先で摘んで持ち上げ、腹の上に落とす。初めて目の当たりにする姉の秘所。欲情に濡れて爛れたそれを、プリムは綺麗だと思った。

まるやかな恥丘から性器周辺を取り囲む、薄い黄金色の恥毛。その細くて頼りない縮れ糸が、ドロドロに溢れかえる愛液で大陰唇にベッタリと張りついている。秘められた花園の門はパツクリと大口を開き、卑猥に波打つ小陰唇の襞の中、淫蜜にまみれたサーモンピンクの粘膜を惜しげもなく曝け出した。荒い息づかいに媚唇がよじれるたびに、ネットリとした愛液が、アヌスの窄まりまでトロトロと涎を垂らす。そのくせ性器の上端では、半分ほど包皮に身を隠した淫核が、この期に及んで恥ずかしそうに震えていた。

姉の股間で咲き誇るこの美しい花園を、悪魔は無残にも散らそうというのだ。

(やめて……)

そんな事は許されない。心を占めていた怒りも憎しみも、焦燥感が押しつける。

「やめなさいレヴ！ 姉さんに乱暴するのは許さないわ！」

「それを決めるのは、あなたじゃない。これは、私達夢魔の存亡のかかった行為なの」

ローレルの右足首を持ち上げて、挿入に逸る怒張を女性器にピタリとあてがった。レヴの肩に乗った足首が、性器同士の接触到ヒクッと跳ねる。

「やめなさい！ やめて、お願い、やめてエッ！」

身を乗り出し、スリムな身体を右に左に振つての猛抗議。しかし新たな触手に巻きつかれ、抵抗するほど自由を奪われていった。手甲の蛇腹が軋んで甲高く泣き喚く。焦燥からくる尿意が下腹部を襲い、スリットから覗くストッキングの太腿を、無意識のうちにせわしなく擦り合わせる。ふと、股間に違和感を覚えたが、今はそれどころではない。

「姉さんを犯すくらいなら、あたしの身体を使えばいい!!」

レヴの動きが止まった。挿入を中断し、ゆっくりと立ち上がって振り返る。

「……それがどういう意味か、あなたは分かっているのかしら？」

分かっている。分かっているつもりだった。しかし、失敗すれば不気味な触手。成功しても人間に仇なすインキュバス。成否を問わず、この腹から化け物を出産するのだ。そのおぞましさに今更ながらに蒼褪めた。それでも――。

忘我の表情で喘いでいるローレルを見下ろす。そんな呪われた運命を、姉に背負わせるわけにはいかない。この愚かな妹の事で、心を痛め続けてきた姉に。

「……好きに……するといいわ」

「ふふ……あははははは！ いい覚悟ね。分かったわ。お姉さん想いの心意気に免じて、私がローレルを孕ませるのは、やめてあげる」

「レヴ……？」

レヴがこんなにあっさりと要求を飲むとは思わなかった。物分かりがよすぎて、かえつ

て怪しい。怪訝な顔で、警戒心のレベルを上げる。しかしレヴの攻撃は、プリムのガードとはまるで見当違いの方角から飛んできた。

「その代わり、あなたがお姉さんを孕ませなさい」

女同士で子供を作れと？ からかっているのだろうか。レヴのような悪魔やホムンクルスのファリナならともかく、人間の女に男性器を繋げるなど、できるわけがない。

「あなたなら、できるわ。ていうか、できているわよ、すでに。……ファリナ。教えてあげなさい」

「はい」

レヴに命じられたファリナが、スリットの中に手を入れた。下腹を撫で、プリムの脚の間にあるものをギュッと握る。

「——!？」

とてつもない違和感。脳が困惑し、混乱した。自分の身体の一部が、ファリナの手の中にあるのを確かに感じる。しかしそこは、女には何もないはずの場所なのだ。

「プリムも、ファリナとおんなじになったんだよ」

レヴがガバッとスカートをめくり上げ、裾をガンベルトに挟み込む。気を失っている間に下着を脱がされていた下腹部に、プリムは驚愕の物体を見た。

「きゃあああああああああッ!？」

女性器の上端、クリトリスの辺りから、男性器が、ペニスが生えている。醜い芋虫のよ

うな肉塊が、股間にだらんとぶら下がっている。ファリナ同様、睾丸は見当たらないが、その異形はプリムから正気を失わせるのに十分すぎた。

「いやあああああつ！ ひィィあああああああああつ!?」

叫んでも叫んでも叫び足りない。知らない間に自分の身体に改造が施されていたという事実、ましてやそれが、幼少時に心の傷を負う原因となった男性器ともなれば、絶対に受け入れる事のできない悪夢。

(そうだ、これは夢。悪い夢……!)

いくらそう思い込もうとしても、しっかりと握り締めたファリナの手が、痛いほどに男性器の存在感を伝えてくる。

「か……ああああ……」

喉が潤れて、声が掠れても叫び続ける。それしかこの衝撃から逃れる術がなかったからだ。だがその声色に、わずかながら変化が訪れる。

「あ……あ……こ、これ……これ、何……?」

ファリナの採むような愛撫によって、ペニスが甘い熱を帯び始めた。やるせない疼きに眉を寄せ、腰がもどかしげにうねる。浮き出た血管をドクドクと脈打たせ、見る見るうちに長く、太く、巨大化してゆくプリムの勃起肉。全身の血液を吸い尽くすかのように海绵体が痛いほど張り詰めて、股間に生えた新しい器官は、三十秒と待たずにファリナやレヴのものと同色のない、特大サイズまで膨らんでいた。

「ふふ、立派なものね。そのペニスは、ここにいる触手の一匹を切り取って、あなたに移植してみたものなの。その反応を見ると、予想以上に上手く繋がったみたいね」

プリムの身体と完全に一体化した男性器は、肌の色も継ぎ目も自然で、元が触手とは思えない。だがプリムは、レヴの話など半分も聞いていなかった。

（股間が……は……あ、熱い……）

肉棒が疼くような熱を孕んで、腰の奥が蕩けそうだ。ペニスに絡みつくと、ファリナの白く細い指。別の生物であったはずの触手肉棒は、その繊細な動きのひとつひとつを敏感に感じ取る。甘い疼きに絶え間なく襲われ、下半身がおののいた。

（こ、これが男性の……？ 凄……感じすぎる……！）

「それを使ってお姉さんを孕ませるのよ。どう？ 面白い趣向でしょう」

「お断りよ！ 誰がそんな事を……。あ……悪趣味なだけじゃない……」

ファリナの愛撫に、言葉尻が弱々しくなる。それでも快楽に呑み込まれまいと、血が滲むほどに唇を噛み、掌を握り締める。

「そのよさをもっと知れば、きっと自分から女を抱きたくなるわよ。……女の中って、とっても気持ちがいいんだから」

耳朶をくすぐる悪魔の囁き声に、触手ペニスは肉欲への渴望に興奮して、ヒクヒクとその身を脈打たせた。必死の抵抗を試みるプリムの心とは裏腹に。

「ほら、こっちはもう期待してる」





を入れるように吐息が漏れる。じわじわと、腰を中心に淫欲が込み上げる。

だが、どこかもどかしい。何か物足りない。今日のファリナは昨夜に比べて、どことなくごちない。確かに耐え難いほどの快感を与えてくるのだが、そこから先は快感曲線が上昇の気配を見せない。快楽を拒否する身にはそれでいいはずなのに、中途半端な愛撫は身体に欲求不満を蓄積し、プリムを悩ませていた。短い息を吐いては唇を噛み、更なる愛撫を求めて突き出したくなる腰を意思の力で抑え込む。服の中がいやな汗で蒸れ始め、肩で切り揃えた金髪もしつとりと湿ってきた。昨夜プリムが教え込まれた手淫は、夢魔に仕込まれただけあつてもつと達者だったはず。そこまで考えてハッと思い当たった。

「この手つき……まさか……」

「そうだよ。ゆうべプリムがファリナにしてくれたやり方だよ。えへへ、上手に覚えたでしょ？」

正解と、クイクイっと手首を返す。顔がカッと赤くなるのをはつきりと自覚した。彼女は、昨夜のプリムの手を、愛撫を、そのまま再現していたのだ。

「あたし、こんな事……あうッ！」

「ンもう。ほら、プリム、ファリナのここ、こうしてシコシコしてくれたじゃない」

新たに刺激を加えながらも、微妙にツボを外している。自分はこんな性愛行為をこの少女に施したのか。こんなにもはしたなく、淫らで、そしてもどかしい未熟な愛撫を。

急に、掌に昨夜の感覚が蘇ってきた。ファリナの陰茎の、あの熱さ、硬さ、重さ。彼女

はこんな下手くそな愛撫で射精してくれたのだ。半目に映る少女の無邪気な顔に、ときめきのようなものさえ芽生え始め、慌ててそれを打ち消した。

(何をバカな！ この娘は……こいつはホムンクルス、化け物の仲間……！)

「あは、プリムも気持ちいいんだね。先っぽからお汁がいっぱい、こぼれてる」

「嘘よ、嘘……！ あたし、ああっ……ファリナ、いい娘だから、もうやめてお願い！」

中断するでもなく、絶頂に至らせるでもなく。生殺しのような状態を継続するファリナの手淫は、プリムの再現とは言いながら、やはり悪魔の業だった。焦れてきた腰が、もつと強い刺激を求めて今にも勝手に動き出しそう。自分の中に眠っていた浅ましきを見せつけられたようで、プリムは羞恥と罪悪に苛まされた。それでも、彼女がわざと下手なふりをしているうちは何とか耐えられる。そう思っていたのも束の間。

悪戯っぽく微笑んだファリナが本気を出した。ぎこちなかった抜き方が滑らかに、より大きく、手首のスナップを利かせリズムミカルになって、プリムの肉茎を責め立てる。

「そんなっ……あッ……！」

中指と薬指で極太の竿を抜き、親指と人差し指は亀頭を潰すように挟み込んだ。鈴口から際限なく湧出する潤滑油で感覚神経が鋭敏になり、少女の指が痺れるような快感を塗り込んでくる。振り返ったペニスの裏筋を小指の爪が引っ掻いた。程よい痛覚に刺激され、ローレルよりも濃く、こんもりと繁った金色の恥毛が、ビリビリとした悦楽に総毛立つ。男性器の快感が女の部分にまで伝播して、トロリと零れた愛液が、太腿を伝ってストッキ

ングに染みを広げる。

「ファ……ファリ……ナ……！ それ……凄すぎつ、ダメエツ!!」

「プリムすごーい、女の子もとろとろだよ！」

粗相を発見したファリナが、股間を覗き込んで無邪気に歓声を上げた。

（そんな事言わないで……恥ずかしい……!）

昨夜はベッドの中で少し触られただけで、それだけでも顔から火が出るほどの羞恥だったのに、今度はまじまじと観察されているのだ。さつき見てしまった姉の秘部が頭をよぎる。自分の「女」も、あんな風に発情しているのだろうか。

「こんな涎をダラダラ流しちゃって、プリムったら、だらしないんだから」

舌足らずなくせに、お姉さんぶった口調でプリムを責めた。

「あ、ほら、割れ目が開いてきた。うわー、触ってもいけないのに、ひとりでパクパクしてる、おもしろーい。きゃは、またトロッておツユが漏れた。凄く凄く、ちよつと中が見えたらよ。ピンク！ あ、穴がヒクヒクした。これって、何か入れて欲しいんだよね、ね!」

「ああ、いやっ……恥ずかしい事言わないで……!」

物欲しそうに唇を開き、蜜を垂れ流す花弁。挿入を待ちわびる小さな膣孔。自分の性器など見た事もないのに、姉のものを見てしまったせいで勝手にイメージが膨らむ。入浴時に洗うのも背徳的な後ろめたさを感じていたプリムには、ファリナの熱心な実況など聞くに堪えない。それなのに耳も塞げないのは、拷問に等しかった。恥ずかしさと、疼きを伴

う快感に上気した顔で、モジモジと内腿を擦り合わせる。振れて歪んだ粘膜の襞が、下腹に新たな疼きを生んで、熱い溜息を漏らしてしまう。

「興奮してきたの？ おちんちん熱くなってきたよ」

女性器の観察の間にも、ファリナの手は一時も休んでいなかった。羞恥心をたつぷりと擗られ、ペニスが新たな境地に追い込まれる。

(な………何かが………中を、昇って………あ………)

尿意にも似た焦燥感。ペニスが爆発しそうな予感に、腰が自然に迫り上がる。それが射精感だと女の身であるプリムに分かるうはずもない。だが、聖職者として、それ以上に女として、越えてはいけない一線である事を本能的に察知して、血の気を失うほどに拳を握り締める。

「んぐ………ん！ んくあふああああああ………ッ！」

苦悩に満ちた叫びを上げて耐える。声が枯れて喉が痛い。

「あなた、さつきから叫びすぎなのよ」

苦笑いするレヴに片頬を包まれ、彼女の方に顔を向けられる。

「ハスキーな色つぼさも悪くないけど、もつと可愛い声を聞かせて欲しいわ」

水分補給よ。近づく女の吐息が言った。ふわりと柔らかい感触が顔を覆う。

「んむ!? んーっ！」

レヴのふくよかな朱唇が、プリムのそれに押しつけられた。振り払おうにも磁石のよう

に吸いついて離れない。下唇を甘噛みされても、舌でノックされても、招かれざる客の侵入を阻もうと唇を堅く結ぶ。だが口元の攻防に気を取られ、下半身がおろそかになっていた。構ってもらえなくなつて拗ねたファリナの指が、陰茎の幹に爪を立てたのだ。

「つあッ——!？」

一瞬の激痛。しかしレヴにはそれで十分だった。わずかに開いてしまった隙間から、蛇のような舌をにゆるつと挿し込む。

「ンひヤッ!？」

そうなつてしまえば夢魔の独壇場だ。熱く、濡れた舌が、狭い口腔内を縦横無尽に、思うがままに蹂躪する。

——ぴちゃぴちゃ、クチュ、ちゆるるっ！

頬の内側は言うに及ばず、整然と並んだ歯列を一本一本、唇の裏の歯茎まで、執拗なまでに舐め回された。食い千切ろうとするとスルリと逃げる。舌で追い出そうとすると罵のように搦め捕られる。ピタリと重なつて、水音を奏でる二人の朱舌。わずかな息継ぎも許されず、右左に顔をずらして酸素を求めぬ。レヴは首を揺らしてそれを逃がさない。小鼻を膨らませて懸命に呼吸を確保する。二人の荒い息が、互いの鼻をくすぐった。

「いいなー。ファリナもプリムとキスしたーい」

その動きがまるで激しく求め合っているように見えたのか、指を啜えて心底羨ましそうにファリナが呟く。

(キス……？ あたしの、初めてのキス……？)

奪われた。こんな魔物に。敵に。母の仇に――。

(悔しい悔しい……悔しいっ！)

しかし淫魔たるサキュバスの技巧に、初心者プリムが対抗できるはずがない。

「んんーッ……んふあん……んむ……ちゅ……ぷあ……ん、チュル、ジュール」

舌の先端を小鳥のように啄まれ、表面のざらついた味蕾同士を擦り合わされると、ゾゾと背筋に快感電流が走った。

「ちゅ……じゅるるるるるーっ！」

舌全体を強烈に吸引され、魂まで吸い取られそうに気が遠くなる。

「あ……はん……ん、やめ……やめて……ん！ ちゅばちゅば、ちゅっ……あん、あはあ……あむっ、ちゅるっ」

「すっごーい、キスしてるだけで、プリムの割れ目トロトロ。あ、おちんちん、また大きくなった！」

プリムの前に跪いていたファリナに、何かが閃いた。

「いいもん、ファリナはこっちとキスするから」

「ん……？ んんーッ!？」

いきり立ったペニスを、生温かく湿ったファリナの口腔が包み込んだ。手指による愛撫とは異なる柔らかい心地好さに目を丸くして、思わずレヴの舌に吸いついてしまう。

「んー、ペロ。えへ、プリムのおちんちん、おいしい……あむ」

眉を寄せて、下半身の新たな快感に耐える。この口唇愛撫も、きつと悪魔仕込みなのだろう。少女の柔らかい唇が微細に蠢き、肉竿の表面に新鮮な快感を呼び起こす。

「じゅぶ、じゅぶぶ、ずる、じゅるる、じゅぶう」

唾液をまぶしながら、ファリナが顔を前後に動かし始めた。肉棒が口内を往復するたびねつとりとした舌が巻きついて、蕩けそうな気持ちよさに溜息が漏れる。吸引するように頬をすぼめ、口腔粘膜で締めつけられると、心地好い切なさに胸が高鳴る。

(ああ……温かい……溶けてしまおう……)

上ではキス。下ではフェラチオと、どちらも初めて味わう快楽体験に挟まれて、張り詰めていた心まで融解しそうだ。

裏筋を丹念に舐めながら、ゆつくりと淫棒を吐き出すファリナ。人形遊びのように頬擦りし、キチキチに張り詰めた根元に軽くキスしたかと思うと、挿んだ脚を広げて股下に潜り込み、女性器にまで舌を滑らせた。

「——ンアッははあッ!？」

プリムのそこは、微かに陰唇の一部がはみ出していた。まるで思春期の少女が、恥ずかしそうに舌の先を見せるように。その肉壁を唇で甘噛みし、愛液にふやけた割れ目に舌を這わせられると、柔らかい粘膜同士の接触の、あまりの気持ちよさに腰砕けになる。

「は……んんはあああッ……ふわあッ!」





ガックリと脱力し、ジョゼフの上に突っ伏す。剥き出しになったお尻の穴に、張り詰め  
たジョゼフ肉棒が埋まっているのが丸見えになった。

「姉さん何を……っ!?」

「あはあ……ねえプリム、わたしもご奉仕の精神が勉強不足だったわ……今はこんな事ま  
で……あつ……お尻でできるように……ああつ……見て！ わたしのご奉仕を見て！」

肛門がヒクヒクと蠢いて、啞え込んだペニスを締めつける。下からの突き上げを迎え撃  
ち、姉のお尻も激しく上下に波打った。姉のアナルセックスを眼前で見せつけられて、あ  
まりの事に言葉を失う。

「ね、プリムもお姉さんに負けないように頑張らなくちゃ」

「——あつ!?」

ぐるりと天地がひっくり返った。レヴに胸倉を掴まれて、扉へ向けて放り投げられたの  
だ。触手の群れが柱状に盛り上がり、飛んできるとプリムを受け止める。身構える間もなく  
軽く目を回し、逆さ吊りに搦め捕られたその様は、さながら蜘蛛の巣に捕らわれた蝶のよ  
うだ。シュッと伸びたレヴの爪に引き裂かれる黒い修道服。震えながら飛び出す控えめな  
膨らみ。若さとサイズのおかげで、逆さ吊りになっても型崩れしていない。

柱が百八十度回転して観客の方を向いた。眼下に居並ぶ、下品な欲情に満ちた顔。

「まずはシスター・プリムのオナニーショーをご覧ください！」

「え、なに!? いやああああ！」

両手を触手に操られ、胸に押しつけられた。ただ掌で円を描くだけだが、勃起したままの突起を掠り、形のいい顎が小さく仰け反る。聖少女の扇情的な痴態に、男達の一物が一気に膨れ上がる。しかし彼らの視線は別のところにも注がれていた。逆さまにスカートが捲れ、何もはいていない、剥き出しの股間へと。

(見られてる……みんなに……あたしの恥ずかしいところ……!)

柔らかくなつた触手陰茎が垂れ下がり、その上にあるのは、天井に向けて口を開いたままの、腫れぼつた女の花弁。溢れた精液はファリナが綺麗にしてくれたが、絶え間なく湧き続ける愛液が金色の恥毛を湿らせる。今度はそこへ触手に操られた手が伸ばされた。蛙のように不恰な開脚ポーズが村人に向けられ、添えられた右手が股間を擦る。

「もっと気分を出して。声も出さないと、お客様は喜ばないわよ」

「勝手な事を……!」

意地でも声など出すものか。簡単はずのその決意は、自分の指によって容易に覆された。触手を振り払おうともがく動きが、中途半端に性感帯を刺激する。悩ましげに眉を寄せ、懊悩する肢体が色つぼくくねり踊って、たまらず下乳を鷲掴みにしてしまう。

(あ……媚薬はまだ効いて……指が、指があ……)

無機質に股間を擦っていた右手の指にも生気が宿り、秘裂を大胆に嬲り始めた。陵辱で解され、すっかり柔らかくなつた膣口や、その周辺粘膜をくすぐる指が自分のものとは思えないほど気持ちよく、切なげに喘ぎながら肩をすくませる。逆さ吊りのせいばかりでは

なく、顔が紅に染まり始めた。

「う……………ああ……………」

乳房を揉んでいた左手も、腹を滑り、焦らすように太腿で寄り道してから、恥毛を掠めて秘裂を觸る。濡れ褌を両手で掻き回し、そのクチュクチュ鳴るいやらしい水音だけで、もう我慢できない。喘ぎながら息づく穴にズブリと指を突っ込んだ。右の中指が温かい粘液の泉に沈む。男達の視線を痛いほど感じ、羞恥に震える生殖孔。自分がいかにはしたない姿をしているかを思うと、恥ずかしさで心臓が破裂しそうだ。

（みんなが見てるのに……………指、止まらない……………あたし、なんでこんなに淫乱になってしまったの？ ああ……………そうよ、これは媚薬のせい……………媚薬に指を操られているの……………）

自分に言い訳しながら、触手に抵抗するのも忘れ、W字に脚を開いた。愛液に濡れた指が自分の性器に入りするのを大胆に見せつける。プリムは自分のしている変態行為に異常なまでに興奮し、見られる快感に子宮を疼かせた。

「指止まらないっ。……………見ないで！ こんないやらしいあたしを見ないでえッ!!」

見るなど言われて素直に従う者など、この場には一人もいなかった。いや、シスターの自慰やアナルセックスを見せつけられ、我慢も限界にきていたのだ。

「あの神父、一人でいい思いしやがって！ お、俺もうたまらねえ!」

だがいくら騒いでも、扉代わりに入り口を塞いでいる触手の壁が厚く、粘液で滑って掻き分けるのも困難なようだ。女の身体が欲しくてもがく男をレヴが笑う。

「さあ、この娘達が欲しければ、頑張つてその壁を乗り越えなさい。苦難の先にこそ、天国は待っているわ！」

欲望を煽られ、それなのに女を前に行く手を阻まれ、男達の顔が、声が、獣と化した。数と勢いに任せてついに触手を突き崩し、教会の中になだれ込む。

男達の半数が、入り口近くの触手柱に取りついた。引きずり下ろされ、床に押し倒されるプリムの、汗で光る太腿や胸に男達が吸いつく。それはレヴやファリナの滑らかな感触とは全く異質で、柔らかさのかけらもなく、無精髭と荒れた唇がチクチクと肌を刺した。四つん這いになって逃げようとしたその目に、残りの半分が、ジョゼフの上で馬乗りになるローレルに向かっているのが見えた。

「姉さん逃げて！」

しかしローレルは動かず、それどころかジョゼフを蹴散らして群がる暴徒に押し倒されるまま、床の上に仰向けになって自ら脚を開いた。

「姉さん？」

「へへ、お、俺が聖女サマを孕ませてやるあ！」

だがローレルの秘所に挿入しようとした男は、レヴに肩を蹴られて引き剥がされた。

「駄目よ。こっちはお尻専門。前に挿れたい人は、そっちの妹を使いなさい」

——おお！ 姉妹別の用途を理解した男達がどよめく。蒼褪めるプリムの前で、ローレルは寝たまま爪先立ちになって腰を持ち上げ、男達にお尻の穴を差し出した。

「どうぞ、わたしのお尻を存分に可愛がって下さ……あはあああん！」

口上が終わらないうちに別の村人が尻たぶを開いて、一気に挿入を果たす。

ローレルは蕩けるような甘い声で、肛姦快楽を享受した。最初の男の精を肛門に受け、次の陰茎を受け入れる。男に跨り、性器と化した括約筋を駆使して、次々と射精へ導いた。

「あ……………凄……………太おい！」

こんなに自我を失ってしまうまで、一体どれだけの媚薬を注入されたのか。すでに射精した者までが聖女の淫気に当てられて、己の陰茎を抜き出す。

「ああ……………勿体ない。ご自分でなんて、なさらないで。前には挿れられませんが、それ以外なら……………どこでも……………ご奉仕して差し上げますわ」

男の上で腰を上下に動かしながら、長い髪をひと房手に取った。目の前に突き出された一本のペニスに、たおやかな指と共にその髪を絡める。

「はああああ！ スベスベの髪が……………まるで天使にしてみらみたい……………だっ！」

「あはあ……………どうか遠慮なさらず、わたしに……………精液を与えてください。わたしの顔に、思い切りぶちまけてくださいませ！」

「おおおおおっ！」

絹糸のような繊細な髪感触に翻弄される男の肉茎が、ほんの数扱きで欲望のマグマを噴き出した。美しい髪が、白濁液でベッタリと汚される。勢いあまった精液は、紅に染まる頬にまで飛び散った。だが奉仕人形と化したローレルは、顔に張りついた精液を拭いても



せず、次の男性器を求めて手を伸ばす。頬に押し当てられた勃起に請われるままに、迷いもせずに口に含んだ。頑強そうな男までが聖女の舌技に呆気なく屈服し、情けない声を上げて果ててしまう。ローレルは口腔内に放たれたそれを躊躇せず胃に流し込み、唇の端に残った飛沫も、舌でペロリと舐め取った。

慈悲深く、聖母の生まれ変わりのようだと言判だったシスター・ローレル。だがその慈悲は、こんな歪んだ形で男に与えるものではなかったはずだ。あまりにも淫蕩な姉の表情と姿に愕然とし、プリムを押さえ込んでいる男共々、しばし呆然と見入ってしまう。だが、一人の若者がプリムの変化に気がついた。

「おい！ こいつ、またでっかくしてるぞ！」

四つん這いの腹の下。まるで発情した牡馬のように、太くて長いシルエットがぶら下がっている。

「こっちもだ。割れ目から新しい露をダラダラ垂れ流してるぜ。姉ちゃんが尻でヤッてる」とこ見て、興奮しちまったのか？」

「そ、それは……！」

男達に囁かれても、性的興奮の事実は隠しようがない。自分でも信じられない事に、姉の淫らかな姿を嘆きながら、その実、欲情の目で見ていたのだ。

「女のくせに俺よりでかいもの生やしやがって」

触手陰茎を力いっぱい掴まれる。思いやりのかけらもない握り方に激痛が走った。



「ウッ……きゆうウあア！」

「わかるぜえ。これだけでかくなっちゃったら、辛いだろうなあ。出したいだろうなあ」  
さも同情するかのような口調でありながら、女性を扱うとは思えない粗暴さで、握ったペニスを軸にプリムの身体をひっくり返す。

「でも俺達が興味あるのは、こっちなんだ」

前戯もなしに、男がプリムの秘裂に入ってきた。

「——ッ!!」

いくら媚薬で興奮させられ、姉の痴態で濡らしてしまったとはいえ、女の身体は望まぬ相手を易々と受け入れるようにはできていない。身体よりも心が軋んで悲鳴を上げた。

「入ってこないで！ あたしの中から出て行ってえ!!」

「おおっ、締まる！」

男の腰が乱暴に打ち込まれる。手足をばたつかせるが、四肢をそれぞれ別の男に押さえられ、いくら超人的な技術を繰るプリムといえど身動きが取れない。

「お……俺も入れてくれ！」

別の男がプリムの顔に影を落とす、肉茎で口を塞いだ。

「ぶんむう!？」

「おおっ、これが女なのか！ ああ舌が動いて俺のに絡みつく！ 気持ちいいイ！」  
少年のような彼は、童貞だったのだらう。初めて触れた女体をいたわる余裕などあるは

ずもなく、デタラメに喉を突き回されて胃液が逆流しそうだ。

「へへ、可愛い顔して、こんなでっかいモノ生やしてやがる。なんか女装した男の子とや  
つてるみたいで……おとお、なんだか変な気分だ、興奮してきた！」

美少女に男性器が生えた姿は刺激が強すぎたのか、男の陰茎がプリムの中で一段と膨れ  
上がった。輪姦に嘆く心とは裏腹に、暴力的に膣壁を抉られる快感に脳天まで貫かれ、少  
年の汗ばんだペニスを夢中でしゃぶる。

「おはあ！ 舌気持ちいい！ 出る！ な、口に出していいだろう!？」

早くも少年が音を上げた。苦い先触れ液を口腔内に撒き散らしながら、射精の予感に震  
えるペニスの先端を上顎に擦りつける。

「ああダメだ出ちまう！ もっとやっていきたいのに……うッ！」

短い呻き。どろっとした若い精の、濃い臭いが口の中に充満し、気管を通って鼻孔を刺  
激した。

「おお俺も出さず！ 膣の中に思い切りぶちまけてやるから、しっかり受け止めな！」

「中はダメ！ 中あ出しちゃいやあああああッ！」

膣内射精に青褪めて少年のペニスを吐き出し、唾液混じりの精液を撒き散らす。

「おらあッ！」

膨らんだペニスが膣壁を押し広げ、粗暴な村男の白濁精液が秘裂に放たれる。抵抗でき  
ないプリムは、男が最後の一滴まで注入するのを待つ以外、何もできなかった。膣が精液

で満たされたのを身体の内部で直接感じる。それは、レヴに犯された時以上の絶望感をもたらした。魔物相手なら、異種間ならば、犬に噛まれたようなものだ、いつかどこかで諦めがついたかもしれない。だが、これは――。

別の中年男が、プリムにのしかかる二人を押しつけた。意味ありげな、下卑た笑みでプリムを見下ろす。彼は再びプリムを裏返し、お尻を持ち上げて後背位で挿入した。

「あ……それダメエ!!」

獣のような姿勢で犯され、前からとは違う快感が下腹部を襲う。中年とは思えない反り返りを持った陰茎が背中側の膈壁を擦り、新たな愉悦で背骨を溶かした。腕から力が抜けて、支えきれなくなった上半身が床に崩れ落ちる。

(後ろからなんて……今までと全然違っ……あ……あ……あッ!?)

締めりのない口の端から喘ぎ声と涎が漏れる。そんなプリムの表情に、背中の男が感慨深げに、しかし嬉しそうに嘲り笑った。

「その顔、お前の母親にそっくりだ」

「かあ……さん……?」

「おう、お前の母親には、よく世話になった。こうやってな!」

中年男の豪腕がプリムの身体を持ち上げる。胡坐をかいた膝の上に脱力した女体を落とされ、一旦亀頭近くまで抜けた肉槍が、子宮口まで再突入した。

「あああああッ深いイイイイイッ!!」

ローレルと入れ替わりに触手ベッドに登ったレヴが、重そうな乳房を揺らしながら身体を重ねてくる。プリムは甘えるように手を伸ばし、仇敵であるはずの女に抱きついた。触手肉棒の予想以上の働きに満足したのだろう。レヴは薄い笑みを浮かべ、裏筋を撫でながら、褒美を与えるように自らの股間へといざなった。

「あう……はあうあふうう……」

プリムは挿入を待ちきれず、淫裂目がけてペニスを突き上げる。

「ふふ、私も、我慢、できないわ！」

レヴも興奮して目を細め、一気に腰を沈めてきた。

「はあああ……はああああああああつ！ なにこれ！ これは、これはあつ!？」

挿入したその瞬間、プリムは強烈な快感の渦に呑み込まれた。優しく包み込むようだったローレルの性器は、すでにプリムにとって特別な存在となっている。しかし妖魔の媚肉は、その姉への愛すら吹き飛ばしかねない、弾けるような快感の連続。まるでそこだけが妖しく蠢く別の生き物。膣口はペニスの根元を食い千切りそうなほどきつく締めつけ、充血して凝り固まった幹には複雑な褻が艶かしく絡みつき、ざらつく天井が龟头を舐め回す時に優しく、時に激しく、ねぶり、吸いつき、抜く膣褻は、無数の女が唇や舌でキスをしてくるかのようだ。愛液のぬめりが性の感度を限りなく高め、繋がっているだけでも耐え難い快感。精を搾り取るための淫ら器官は万華鏡のようにひと時たりとも同じ顔を見せず、変化に富んだ感触で牡器官を楽しませた。

「気持ちよさそうな顔しちゃって、そんなに私の中はいいのかしら？」

「あ……あああ……す、凄いよお……気持ちいいのが、あたしのおちんちんペロペロって……こんな、こんな凄いの、初めてエッ!!」

触手の全身愛撫もたまらない。めまぐるしい快感の嵐に翻弄され、視界に極彩色の光が乱舞する。まるで初体験の童貞少年のように、挿入から三十秒と経たず再び射精感が込み上げてきた。

「ダメよ！」

レヴの声で、ペニスに巻きつく極細触手。根元を縛って射精管をギュッと締め、呆気ない幕切れを許さない。

「それ、それきついいい！ 出させて！ 出したい！ が、我慢できないよお！」

限界まで追い込まれると生来の甘えたがりが出てしまうのか。しがみつこうとして伸ばした腕をレヴにいなされ、首を、腕を振り回して駄々を捏ねた。

「まだまだお楽しみが残っているじゃない」

レヴはプリムの身体を引き倒し、触手ベッドの上で自分を組み伏せる姿勢を取らせる。そして指を咥えて恨めしそうに二人の情事を見ていた少女を、手招きして呼んだ。

「さあファリナ。お待たせ」

ふたなりのホームクルスが、パッと顔を輝かせる。レヴの手によってパツクリと開かれた、プリムの股間で果汁を滴らせる媚肉果実。その淫靡な光景に魅了されたように、若々

しい張りを見せるヒップに嬉々として飛びついて、触手の粘液に濡れる半球を愛おしそうにひと撫でする。

「……ファリナ？」

「えへ、やっとプリムとやらせてもらえる」

スカートをたくし上げると、いきり立った肉槍が、跳ねるように飛び出した。無邪気な少女には似つかわしくない、青筋を立てて暴れる巨根を握り締め、待ち焦がれたプリムの濡れ秘肉を引き裂くように突き入れる。

「ファ……アリナアアアアアアア！」

バリバリと身体が破裂するような衝撃。そして津波のように襲い来る陶醉美。体内で弾ける、生まれてからの記憶が全て飛んでしまうような圧倒的な興奮。ファリナの陽根の前には、触手の輪姦さえ見事に等しい。

「ファリナ……ファリナのおおおお!? す、すごおおおい!!」

「あら、そんなに気持ちいいの? そういえば孕ませようと思って女の子の方は貰ったけど、男の子の方はまだだったわ。私も楽しんでおけばよかった」

それは夢魔にも劣らぬ逸品。長さ、太さ、硬さ、そして形。それら全てがあつらえたかのように、プリムの肉壺にしつくりくる。

「こんなあ……こんなにぴったりだなんてえ……!!」

あまりの相性のよさに感じすぎて、身体に力が入らない。涎を垂らしてガクガク震える

プリムの過敏さに、レヴが戸惑いを見せるほど。小さく頬を吊り上げ、軽く嫉妬の表情さえ浮かべている。

ファリナが純朴そうな容姿に似合わぬ妖艶な腰つきで、膺襷を巻き取るように捻りながら剛直を突き入れてきた。まんべんなく刺激された膺内性感帯が、プリムを被虐の悦びで洗脳する。まるで失禁したように大量の愛液をしぶかせて、愛液シャワーを浴びた触手が活気づき、太腿を濡らすジュースを啜った。

「ファリナはね、ジョゼフが自分の相手を務めさせるために造ったんですって。でも、ふふ、こんなおちんちんまでつけて、一体どんなプレイをするつもりだったのかしら？」

ジョゼフが貫かれる場面でも想像したのか、レヴが肩を震わせクスクスと笑う。

「でも思い入れが強すぎたのね。なかなか手を出せずにいたところを、私が先にちようだいしちゃった。ふふ、大事にしすぎるのも考えものね」

「やっぱり気持ちよくしてくれる人がいいもんね。プリムはファリナの事好き？ ファリナのおちんちん好き？」

しかしプリムはよがるばかりで、そんな問いかけなどに答えられない。膺を犯される快感にペニスも反応しているのに、極細触手に射精を封じられ、絶頂手前の生殺しに悶えていたのだ。返答しないプリムにファリナは唇を尖らせ、急にピストン運動を止めた。

「あうん！ やあ止めないでえ！ 好きだからあ！」

突然のおあずけに慌てて答え、抽送の再開を請う。嫌悪の、憎悪の対象であった事も忘

れ、この世ならざる快感を与えてくれる少女にお尻を振って媚を売る。しかし一向に動いてくれないので、自分で腰を動かした。ペニスの根元で膣口を刺激するようにグリグリと小さな円を描き、わずかばかり生まれる快感にむしゃぶりつく。

「ファリナと、ファリナのおちんちん、どっちが好きか聞いているの！　ちゃんと答えてくれなきゃ抜いちゃうよ？」

「やあ！　抜いちゃやだあ！　気持ちいいのがいい、いいのがいいイッ！　どっちも好きい！　ファリナも、おちんちんも、どっちも……」

支離滅裂。だが言いたい事は伝わったらしい。子宮の奥まで、ズンツと重い快感の衝撃波が撃ち込まれる。

「しゅきい　い　い　い　い　ッ！」

焦らされていた分、一気に絶頂へと押し上げられた。恍惚に溶けた頭の中をピンク色の火花が飛び散り、肉筒が収縮しファリナの巨根を絞り上げる。

女性器でのエクスタシーが飛び火して、精液を噴き出しそうにペニスが暴れ狂った。それでも射精は許されない。性に狂った聖なる少女は、涙と涎で顔をぐしゃぐしゃに汚しながら、レヴの性器に欲望の白濁を放出しようと滑稽なくらい懸命に腰を振る。ファリナが後ろから突いてくるたび、絶頂を極めた肉欲棒が何度もレヴの中でしゃくり上げる。しかし射精を堰き止められ、レヴの膣壁を擦る快感が、絶頂できない絶頂感をもたらすのみ。

「許して！　もう許して、精液出させて！　レヴの……中に出したいイ！」



絶頂と絶頂封じのもどかしさ、快樂と苦痛の二重奏に、膺の中でペニスが鈴口から涙を流す。生きるために性を糧にしている夢魔と、性の人形として造られた少女に翻弄され、白目を剥いて半ば気を失いかけた。

「気絶したら、気持ちいいのが分からなくなっちゃうわよ！」

レヴの痛いほどの締めつけが、極細触手の緊縛が、プリムの淫肉棒を拷問する。

「そだよ。ファリナはまだイってないのに！」

ファリナの灼熱棒がプリムの媚肉を掻き回す。

「ふひあやッ！ ひぎいいいいいいッ!!」

三人の女体が重なって、ひとつのオブジェを作り上げた。レヴの乳房にめり込むプリムの胸。背中にはファリナの硬い蕾を感じる。レヴの腕と羽が二人の少女を包み込み、複雑に絡み合った三人の脚は、靴がなければどれが誰のものなのか判別できない。

プリムの顔を挟み込む、夢魔とホムンクルスの少女の頬。妖女達はそれぞれにプリムの首を捻って唇を求め、交互に濃厚なキスを交わした。一方とキスをしている間、もう一方には耳を舐められ、奥まで舌で掻き回される。ゾクゾクする快感電流で、時にはキスよりも耳が気持ちよくなって、嫉妬したキス相手に唇を噛まれた。

「んちゅ、んば……ンねエプリムう……」

「ん……んふあああああああ！」

耳を舐めながらファリナが嘔きかけた。耳朶に浴びるその熱い吐息だけで、プリムは失

神しそうになる。

「プリムのおちんちん、あふあん、おいしかったからあ、んちゅ……レヴの、中に出したら、あは……後で、ファリナにも、挿れてね」

「いれりゅう！ ファリナにも……おちんちんっ挿れてあげりゅうッ！」

快感に頭が痺れ、言葉が幼児化してしまう。挿入されただけでもこれだけの快楽をもたらすホームクルスの肉体。その女性器に挿入したら、その淫肉を味わったら、一体どれだけの快楽天国が待っているのか。限りなく恐怖に近い期待感にペニスが疼き、パンパンに膨らむ。緊縛触手が食い込む痛みすら射精への欲求になって、プリムをよがり狂わせた。

「ンふああああん、また、気持ちよくなっちゃうッ！」

昂ぶる性感のままに上体が浮き上がる。二人の陵辱者はプリムの動きに合わせて体位を変え、前後からの座位で聖なる少女を犯し抜いた。

「ひはっ、ヒンッ、ン、はぁッ！」

右腕でレヴの頭を抱く。腰を捻りながらファリナの肉棒に膣を擦りつけ、自分の肉棒でレヴの肉襖を突き上げる。

「あああん、これいい！ すっごく、気持ちいいいいいいッ！ またっ、ああっ、またイク、ヒッ、ヒッ、ヒクッ!!」

その危機感すら孕んだ嬌声に、ローレルの乳を飲んで復活した触手も三人の絡みに参戦し始めた。レヴやファリナに割り込むように、或いは三人をひとまとめに、喘ぐ女体を雁



字擲めに巻き上げる。

「やん、ファリナの中にまで……！」

ファリナの幼い亀裂、そして三人の肛門。空いている穴を求めて、褐色の肉紐が挿入を始めた。ホムンクルスの少女は後ろの穴へ挿入されるのは初めてなのか、気持ちの悪い違和感に、プリムの身体に腕を回して助けを求める。しかし性欲に狂った聖少女には通じない。背中に当たるファリナの乳首の感触に、顎を突き上げて、悦ぶだけだ。しかしファリナは性愛人形として生まれた少女。間を置かずにアヌスの快感に順応しただした。

「これ、お尻、すっごおい……。なんか、なんか、背中蕩けるう……。ふああああん、あふ、き、気持ちいいよお！ プリムッたら、こんな気持ちのいい事してたんだあ。プリムずるい、ずるーい！」

プリムのせいではないのに、責めるように激しく腰を振り立てる。

「ひやッ!? ファリナそれダメエ!! それ……それあああッ! そんなに中つ、奥、つ、突かれたルアああああッ!!」

ファリナの暴走はプリムを身も世もなく乱れさせ、二人の過激な腰遣いは当然夢魔をも悦ばせた。

「あなた達の相性がそんなにいいなんて驚きだわ……。どうしてそんな……。あん、凄い！」

何かレヴの心に引っかけたのだろうか、訝しげに眉を擧めたが、些細な疑問など、荒々しいまでの快感に押し流されてしまったらしい。

だが最も狂おしい快感に悩まされていたのは、やはりプリム。男と女の性感を同時に与えられ、アヌスまで抉られ、快感中枢が混線して脳神経が焼き切れそうだ。

「んはッ！ 助けて！ あたしおかしくなっちゃうよお!!」  
お願いキスして！ あたしおかしくなっちゃうよお!!」

母の仇と憎んでいた相手にキスをねだっているのだから、すでにおかしくなっているのかも知れない。それでもいいと、プリムはレヴの唇に夢中で吸いついた。左右に首を傾けて、深く深く舌を挿し込む。争うようにジュルジュルと唾を吸い合い、何往復もした二人の混合唾液が、濃厚な媚臭を放つ。ファリナの舌がそれを掬って二人の顎を仔猫のように舐め取った。二人のキスに参加して、三枚の肉片が互いに舌愛撫を交わし合う。

「ふふ……二人とも……凄いわ、ね……っ！ ああん、そんなん、私が、プリムのなんかで、あん、こんなん！」

「ああんプリム、これ凄いの！ 気持ちいいのお！」

「ふふっ、ファリナったらそんなによがっちゃって困った娘ね。プリム、あなたファリナのお姉さんなんだから、もっと凄い触手の楽しみを教えてあげなさい」

お姉さん？ どういう意味か考える前に、身体に取りついていた触手達が一斉にプリムの乳首を啄み始めた。尖った肉蕾を潰すかのようにグリグリと頭を押しつける。それだけならばすっかり馴染みになってしまった刺激。しかし今度はそれだけでは止まらない。異様な光景が幕を開けた。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**